

洋書輸入協会会報

VOL. 8

NO. 11

(通巻91号) 昭和49年11月

理事会報告

10月11日(金)

- (一) 9月分収支計算・予算対比表を検討の上、承認。
雑誌資料委員会へ基本カード作製のために予算6万円を割当てることとなった。
- (二) 三菱重工爆破事件で被害をうけたゲーテ書房に対して理事会としてお見舞いをするに決定。
- (三) Springer Verlagからの取引条件変更についての一方的申し入れ(定価のアップ、ディスカウントのダウン)に対して抗議することに決定。
- (四) 内外の諸情勢につき討論。
- (五) その他。

10月28日(月)

- (一) Pergamon社のディスカウントのダウンへの対策結果報告。
- (二) 賛助会員入会申込み審議。
(有)オークラ・サイエンス
代表者 大垣雅昭氏
業務 Lippincott
Lea & Febiger
Ann Arbor Science
Verlag Chemie
以上四社の代表業務
紹介者 丸善
……審議の結果承認。
- (三) その他情報交換。

文化厚生委員会だより

第二回麻雀大会

前回好評で開催が期待されていた協会主催の麻雀大会が、10月26日(土)午後1時から神保町の新世界サロンで、36人の指自慢を集めて盛大に挙行された。競技は半チャン45分毎に最多得点順に組替えの3回戦が行われたが、役満貫が4回も出る大激戦となった。短期決戦のため日頃の実力を発揮できずに終わった選手も多かったようだが、ベテラン福島氏(極東書店)が終始着実なペースで勝ち進み、優勝した。又渡辺委員長も競技に参加し正に善戦健斗(プラスマイナス0点、18位)、役満貫をも獲得した。競技終了後、新世界飯店で表彰会が賑やかに行われたが、席上、渡辺委員長より優勝カップが寄贈される旨発表があり拍手をあげた。午後5時半散会。尚その後の情報によると、欲求

不満組のプレイオフが数卓、深夜まであったようである。公式競技の主な入賞者は次の通り。

1位 福島氏(極東)	総得点7万4千点
2位 渡辺氏(タトル)	〃 5万8〃
3位 雨宮氏(タトル)	〃 5万〃
4位 古島氏(メクレンブルグ)	〃 4万6〃
5位 小橋氏(三省堂)	〃 3万3〃

役満賞

国士無双 渡辺氏(洋販) 渡辺氏(タトル)
四暗刻 原田氏(洋販) 雨宮氏(タトル)

上杉(UPS)記

理事会報告……………	1
第2回麻雀大会……………	1
国際書籍展視察団に参加して……………	2
中国の出版界見聞記……………	3
出版資材の不足—世界的傾向……………	5

Book Review No. 20……………	6
(世界のペーパーバック)	
外国出版社の紹介 No. 32……………	7
(Dietz Verlag, Berlin)	
海外ニュース……………	8
ニュース……………	9

通関統計……………	9
事務所移転ご案内(轉トツペン)……………	9
新入会員のお知らせ……………	9
(有)オークラ サイエンス)	
総代理店ご案内……………	9
広告(アカデミアミュージック)……………	10

国際書籍展視察団に参加して

日本洋書販売配給株式会社

美術部 白井 明

洋書輸入協会主催の国際書籍展視察旅行も今年で第6回目を迎える。特に今年は昨年末の石油不足に始まる諸物価高騰と不況ムードの為、参加費用も高騰し、団員募集には相当苦勞するものと思われたが、各社の協力を得て団員27名で出発することになった。

団長には過去3回の旅行団に参加されている平岩さん（アカデミアミュージック㈱）副団長に阿部さん（タイムライフ㈱）と海外旅行の経験豊富なお二人を迎え、経験の浅い無力な幹事役の私としては、唯御二人の後に続いて行けば良いという気楽な旅行をすることが出来た。事実、この御二人のお陰で今回の旅行が有意義で楽しく、そして無事終了出来たのである。今も御二人の御尽力に感謝している次第です。

又、今までの当視察団に参加された方々がそうであった様に、今回参加された方々はまったくの紳士淑女であり、とかく外国で評判の悪い日本人団体旅行者の行儀の悪さ等が無く、逆に日本人の評判を高めて来たのではないかと自負出来る程である。ヨーロッパ各地に廻っていて気付くことは、本当に日本人の観光客を多く見かける。これは我々も有名観光地を中心に旅行しているので当然の事かとも思えるが、観光地、ホテル、レストラン、そして街中で驚く程多くの日本人と出会う。中にはホテルの食堂へスリッパを履いて食事に来る者を見かけたこともある。又、ホテルのロビーを会議室と間違え、酒を飲みながら声高にミーティングを始める十数人の団体もあり、時として同邦人の我々が注意したくなるグループにも何度か出会った。しかし我々のグループにはこのようなことは決してなく、全員が紳士淑女であったことを大いに誇りとし喜びとしている次第です。

さて、今回の旅行団は、10月2日（水）輸入協会委員の方々を始め関係者多数の御見送りを受けて東京を出発、最

初の訪問地ロンドン（2日）を皮切りに、マドリッド（2日）、ローマ（2日）、ミラノ（1日）、フランクフルト（3日）、ジュネーブ（2日）、パリ（3日）、往復機中（2日）と、計6ヶ国7都市を18日間で廻って来た。その内ロンドン、フランクフルト、パリの3都市ではほとんど雨に降られ、特に最初の訪問地ロンドンが雨で非常に寒く、風邪をひく者が続出したが大事に至る者が出なかったことは不幸中の幸いであった。残る半分の都市は晴天続きで、やはり旅行を終わってからの印象では晴れていた時に訪れた所の方が良いようであった。人間とは勝手なもので、天候によって大分気分が左右されるのであろう。（もっとも中には小雨降るパリの風情が好きだと言った人も居たが。）

我々視察旅行団の主目的であるフランクフルトへは10月10日昼頃に到着、昼食後さっそく会場を訪れたが、さすがにその規模の大きさには驚かされる。主催者側の話では、今年は参加国、出品点数共に最高との事、成程これでは僅か3日足らずの日数ではとても全部を観られないといった先輩達の意見が良く解る。又今回参加された方々も、各々自分の専門とする分野のものだけしか観て来られず、ホテルに帰って来たら、自分の観て来た情報を交換仕合っていたことも納得出来る程であった。私自身にとっても、仕事上美術書関係の出版社のみを廻って来るだけで3日間を費やしてしまい、他の分野のものは何も観て来られないという始末で、ここへ仕事をしに来た者にとってはもう少し時間が欲しいというのが実感であった。もっともこれは、観光で廻って来た他の都市でも言えることで、限られた日数の中では贅沢な意見かもしれないが。

ところで、今回の視察団には、東光堂石内社長の御骨折により、国際書籍展事務局長のタウペルトさんと連絡がとれ、氏の計らいで旅行参加者全員に会場への無料入場券と案内書が事前に入手出来たことを感謝致します。

タウベルトさんには当日さっそく御礼を言いに出掛けたが、日本にも数回来日したことのある親日家の氏から、逆に、この書籍展を大いに利用し、業界の発展に努力して下さい、と励まされこちらが恐縮する程であった。

今後も氏を通じ、国際書籍展視察団を有意義に発展させて行きたいものである。

さて短い日数で駆足で廻って来たヨーロッパの感想を述べることは早計で感違いかも知れぬが、敢えて私見を述べるならばどの都市も実に良く調和がとれているということである。古いものと新しいもの、自然と人間、人間が造り出した造形物と自然、人どもの等々、実に良く調和がとれている。

これは決して一朝一夕に出来たことではなく、又一人の人間のプランによるものでもない。国を愛し、自分の街を愛した人々が、長い年月を費して造り上げたものである。ローマの遺跡の中に生きる現代の街、フランクフルトの街と囲む広々とした森、風景の中に見事に溶け込んだスイス

の家々、街全体が美術品で飾られたパリ、紺碧の空を持つマドリッド等々、そして老後を保障され明るく楽しそうに生活している老人達、無邪気に遊ぶ子供達等々、真にうらやましい光景である。振り返って我が街東京はどうであろう。

ところで、気流の悪い日本近海を通り抜け無事羽田に着いた時、一番喜んだのも自分ではないだろうか。私は日本の国が好きだし、今まで訪ねていたどの街にも住まおうとは思わない。やはり生活するのは東京が一番だと思っている。今はそうでなくとも、日本人の智慧と勇氣は必ず近い将来世界一住み良い国を造り出すものと信じている。自分の仕事もその為に必要な西洋の秀れた智慧を輸入することになり、その様な仕事に従事出来ることを誇りに思っている次第です。

最後に今回の視察旅行に御協力頂きました皆様に感謝致します。有難うございました。

中国の出版界見聞記

関 誠 夫

今年8月に中国を訪問した。中国には北京を始め全国に新華書店（小売店）がある。みな同じ名前である。人民公社の農村にも新華書店がある。書店の大きさは夫々土地の状況により大小サマザマである、が本屋はどこでも混んでいる。皆一列に整然と並んでいる。

北京の新華書店は、四階建てビルの一、二階が売場となっており、一、二階共夫々100坪以上である。入口左右の道路側には大きいウインドがあり、本が展示されている。

5間×20間位、長方形である。一階の右側の壁面には、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの四つの大きな写真が掲げている。壁面に棚があり、その前にガラスケースがあり、本が並べてある。棚とガラスケースの間に店員がいて本を売っている。中央にも楕円形にガラスケースがめぐらされており、その中に両面棚が一列入っている。その棚とケースの間に店員がいる。ガラスケースの上には

パンフレットなみの薄い本のみが並べてある。普通の本は棚かケースの中に入っており、直接手にふれられない。日本みたいに本を勝手に手に取って立ち読みをすることはできない。棚には文学、医学………の分類がしてある。

二階に上るところに一つのカウンターがあり女性がいた。ここは書籍に関する問合せに應ずるのであろう。私は言葉が通じないので、ここで写真を撮ってもいいか、とゼスチャーをしたら、許可された。二階に上がると、すぐのところに今週の新刊が展示されているガラスケースがある。反対の奥には、地図やポスター（生産に努力している人がいて、そこに標語が出ているもの）等も売っている。二階は中央が通路になっており、両側の壁面に直角に夫々長椅子を何列か並べて、図書館のように腰をかけて読書ができるようになっている。書籍の無料貸出しをやっている。その横にあるガラスケースには貸出しサンプルがあり、壁に

は貸出図書の索引がかかっている。片側は一般人、片側は学生専門であり、一般人は勤め先の身分証明、学生は学生証を提出すれば誰でも無料で本を借り出し、そこに腰をかけて読書できるのである。ここの満員で、皆熱心に読書していた。

この大きい新華書店の隣にもう一つの小さい新華書店がある。ここの営業時間は午前7時半から午前9時半まで、午後7時半から午後9時半までだけである。大きい書店が朝9時半から夜7時半までで、ここは一般並みの営業であるが、小さい店は、夜勤の人のためと思う。何故ならば、大・中の工場は三交代で昼夜兼行であるので、その人達のために24時間営業の百貨商店もあるからである。

◎定休日はない、但し一人一週一回休みをとる。

◎サラリーは一般なみ、書店でも紡績工場でも大体同じ。

◎募集、国が人員を配給するので特にない。

◎マージン、少々とのこと。

◎出版に至る過程、企画は企画部が企画し、上部と相談して決定する。決定したならば、その後の原稿——印刷——製本は流れ作業的に一貫して進行する。

◎部数決定、各地にある新華書店と相談して決める。

◎返品、なし。不良本以外は各地にて過不足を調整するのではないという。ないといってもいくらかはあるでしょう、とたずねたが、ない、という。あとでわかったことであるが、出版点数が日本の如く多くなく、どこの書店でも限られた本が並べられてあるので、長い期間には自然に売れてしまうのだらうと思う。

◎出版関係の傾向、本は安くなりつつある。

◎翻訳権、国際書店が担当し、各国と契約している。

◎出版関連商品、レコードはあるが、カセットはない。

◎どんな古典を読むかと二、三の人に質問してみたら「三国志」「紅樓夢」という。

では現代小説は、恋愛ものは、と聞いてみる。現代小説はある。革命的なものの中に少々恋愛をいれる。恋愛のみの本はない、という返事である。

◎マンガ娯楽本は、と聞くと、マンガに似たものはある。少年マガジンのようなものはないとのこと。

◎ベストセラーは、

毛沢東選集、毛沢東語録、批林批孔のものは別格であるので、これらを除いては、「浩然」著、堯柏天「（うらかな太陽）である由。原書（三巻もの）を買おうと思ったら、一、二巻は品切であったので、三巻のみを買った。A5判 並製 1,185頁～1,788頁（三巻通し頁である。）定価 1.30元（1元は日本の150円）人民文学出版社発行となっていた。さらに日本語版の「中国の地理概況」を買った。B6判 並製 163頁、定価380円（日本円）1974年初版発行、出版は外文出版社、発行者は中国国際書店であった。

◎現代有名作家は、浩然である。

◎日本のどんな本を読んだか、の問に対しては、夏目漱石「坊ちゃん」、小林多喜二「蟹工船」、他に芥川竜之介、三島由紀夫の本という。

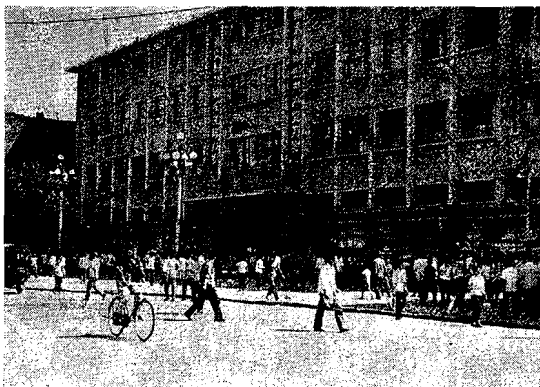
◎日本の本をどこで買うかという、外国の本（日本を含めて）がおいてある会社があるので、そこで買うとのこと。

◎中国書籍の輸出入について。

輸入には図書輸入会社がある。輸出は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（主力）・欧洲、とのことである。

以上簡単ながら見聞した所を述べてみました。御参考にすれば幸いです。

（筆者は、明文図書株式会社 専務取締役）



北京新華書店前景



北京新華書店一階売場

出版資材の不足 — 世界的傾向

(Those Shortages: They're Now Worldwide. Publishers Weekly Sept., 23 '74 p. 123-5)

世界的なインフレが出版コストを急上昇させているなかで、どこかの国の出版社も本の生産に必要な原材料の獲得に躍起となっている。ここ数年、ステープル（製本等に用いるU字状に曲げた針金）や紙、紙をベースとした材料の供給不足は当分続くであろう。紙、ボード、クロス、プラスチック、印刷インク、機械金属はすべて今日では国際的な商品であり、これらの一国における供給は世界の他の国々の供給と価格に大部分依存している。

申すまでもなく紙は、本の生産において最も重要な商品であり、出版社にとって最大の問題である。紙の入手はすべての出版社に困難となってきたが、欧州、日本及び発展途上国では北米の出版社より更に困難となっている。欧州大陸及び英国の用紙価格は米国よりも高く、二、三の印刷工場では紙不足のため時折操業を停止せねばならなくなっている。封筒は特に供給が逼迫しており、メイル・オーダー企業は現在封筒を求めて世界市場を買い漁っている。また製本用ボードは欧州では危機的な供給状態であり、出版社はボードを求めて米国へ殺到している程である。

新しい印刷パターン

紙の状態が欧州における印刷物のパターンを変えつつある。スカンジナビア諸国は紙とパルプの主要な生産者であるが、いまや顧客を選択することが出来る。現在欧州は価格が高いため、スカンジナビア諸国の輸出市場は米国に対し優越性を保持している。

米国の出版社は、他の諸国に比べ必要用紙の入手はそれほど困難ではない。その理由の一つは、新聞や雑誌の低品質の用紙を本の用紙に転換し得る能力を持っているからである。また本は再生品を容易に使用することが出来、それは新しい用紙を入手するよりもずっと簡単である。米国やカナダの製紙業は欧州の工場より統合が進んでおり、現在の能力からみて生産を増大させることは容易なのである。

A P I の国際部門の副社長である Dr. Irene Meister によれば、欧州の製紙業は現在の傾向の帰結として近年中に重大な変化に直面するであろう、と述べている。Common Market Commission のパルプ及び製紙業についての最近の研究によれば、統合されていない小規模工場が主要な問

題として指摘されている。世界的なパルプ不足は、欧州で統合された企業が少い故に深刻であり、欧州の出版社は、用紙の選択が規制されているので、いやでも仕事が出来ない状態である。従って欧州の市場でも米国の出版社と同様に再生紙を使用することと、上質紙のストックを低品位のものに切替えていくという傾向を辿る見込みである。

発展途上国の打撃

この傾向によって最も深刻な打撃を被った地域の一つは低開発諸国である。これらの国の政府は大量教育とマスコミュニケーションのために書籍を使用する必要を強く感じてきた。しかし伝統的に外貨を節約するためにスポット市場 (in a spot market) で出来る限りの低価格で用紙を購入しようと努めてきた。今日供給逼迫のなかで低価格の下限が上昇し、スポットでの入手可能性は制限されているので、これら諸国はその出版計画のための用紙を調達するのに最大の困難を経験している。

昨年6月東京で開かれたユネスコ会議では紙不足に対処するための国際協力が要請された。席上インドの情報放送相は昨春新聞用紙が30%カットされ、続いて6月のは更に10%カットされたと報告した。いくつかの新聞は消費量を50%カットするよう要請されている。また Press Foundation of Asia は出版物の成長が止まるか或は低落するという「災難である結果」を予言した。国連のFAO代表は紙不足は少くともここ3、4年は続くものと予測している。それは、製紙業の低利潤のため能力を拡大するだけの新規の投資に欠けていたためである。

米国製クロスへの新しい需要

クロスは綿花不作のため過去数ヶ月逼迫していた。今年は米国製クロスへの需要が急激に上昇している。日本は一昨年大量のクロスを取引きしたが、今では極端なインフレが購買力を低下させたため流動性資金が不足しているのである。米国製クロスへの比較的高い需要にも拘らず、近い将来において供給は充分であるというのが現在での見通しである。

欧州は米国よりビニールを多く使用するが、価格は天井知らずに上昇している。

印刷用インクは他の材料の供給逼迫が示している程の注目を浴びていないが、これも若干の出版社や印刷業者の関心を惹いている。実際インクになる凡ゆる材料はやや供給がきつくなってきているが、年末までには不足は解消されるであろう。インクに色彩を与える顔料や材料は入手状況が様々である。カーボン・ブラックは最上の供給状況であり、青もよく更に豊富となるであろう。黄色はそれが作られる材料が不足しているので若干の問題がある。赤は最も不足している顔料の一つであり、ここ数ヶ月はインク業界に最も困難な問題を提示している。しかし、いずれにせよ中間の顔料生産能力は一年程度以内に増大が期待出来る。インクの供給は来年か1976年始めには再び均衡するであろうが、価格は高価格となる。

書籍生産の機械類については金属の不足が掲げられるが、そのため新しい設備とスベア部品の受け渡しが遅れている。しかしこの点は欧州よりも米国で顕著である。現在設備メーカーにとっての重要な問題に原料不足と並んでイ

ンフレ的な賃金と費用の問題がある。欧州及び日本におけるインフレは当該国の機械製造の経済学を変えつつある。

本の資材不足のうち、用紙と紙を基礎とするものが依然として危機的である。今日の出版業成長への第一番の制約であるばかりでなく。来るべき将来においても依然として問題であろう。不足の時代が出版社の意識に初めて翳を落してから40~50%価格が上昇し続けたとしてもそうなのである。価格は必要な新規の投資を引き起す程には未だ上昇していないと製紙メーカーは述べる。新規に製紙工場を作るのに必要とされる3年間よりも遙かに長期の1980年まで用紙の分野での苦痛の軽減はありそうにないといふものは観察している。一方出版価格は生産費の上昇をカバーするように着実に上昇しつつある。10ドルの小説がこの秋にもいくつかの国で現実となるかも知れない。書籍産業の多くのものが購入者が反乱しない程度に価格を高くしようと考えており、或る種の書籍はコストと価格の圧力によって市場から締め出されている。

BOOK REVIEW No. 20

「世界のペーパーバック」

金平聖之助著 346 p.p. ¥ 2,200

昭和48年11月 株式会社出版同人刊

現在ペーパーバックというと、ペンギンブックス、ポケットブックスの代名詞のようにになっているが、世界の出版界に一大革命をもたらしたペーパーバック、即ちペンギンブックス、ポケットブックス、レクラム文庫、リーブル・ド・ポッシュなど有名なペーパーバックシリーズについて、第二次大戦後アメリカにはじまってヨーロッパ各国に波及した「ペーパーバック革命」を、その歴史はもとよりその種類の多様性と現状など豊富な資料をもとにしてペーパーバック研究の第一人者である著者が明らかにしているのが本書である。

第一部ペーパーバックの歴史では、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアのペーパーバックの誕生とその成長過程、戦後の出版革命といわれているが、部数が不変であることによる将来への不安、第二部種類と現状ではペーパーバックの多様性、ペーパーバックの流通機構、公立図書館におけるペーパーバック、広告媒体としてペーパーバックの利用、「100万部の売上げを

記録した作品が映画化された場合には、更に100万部の売上げが加わるのは確実である」ことや、売行が振わず発行元ではそのペーパーバックを刊行したのを忘れていたが映画により一夜にしてベストセラー入りしてしまったような映画とペーパーバックの相乗効果について、第三部児童向けペーパーバックでは、アメリカ、イギリスの児童ペーパーバックに言及し、児童出版社の大半がペーパーバック出版に関心を抱いていることなど興味深く記述されている。

巻末には資料として、1953年のパウカー出版講座でフリーマン・ルイス氏が行った「アメリカにおける紙装本」、アメリカン・スカラー誌に掲載された「アメリカにおける書籍の未来」と題する座談会、ベストセラー・リスト（米）には「ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー・ペーパーバック特集号」による1968年中に70万部以上の印刷部数を記録したペーパーバック・リストが付されている。

著者は日本出版学会の理事であり出版に関する論文を数多く発表している。本書はペーパーバックの全貌がわかる点でペーパーバックに関する百科事典であり、業界人にとって又読書家にとっても興味深く読める書である。

(T.K)

Dietz Verlag, Berlin

Verlag J. H. W. Dietz Nachf., Bonn-Bad
Godesberg

ディーツ社といえば、いまは東ベルリンにある Dietz Verlag Berlin のことを考えるひとが多い。西ドイツにもディーツ社がある。それが表題の下の方である。もちろんドイツが東西に分かれる前には、ディーツ出版社はひとつしかなかった。ただし戦前といっても、1933年までのことである。というのは、この年の3月ディーツ社はマルクス歿後50年記念として“Karl Marx, der Denker und Kämpfer”（思想家・戦士マルクス）を出版したのをさいごに、ナチ政府によって財産を差押えられ、没収され、事実上業務を停止させられたからである。これは、この年一月にヒトラーが政権をとり、共産党、ついでドイツ社会民主党が禁止されたのにもなつてとられた弾圧のひとつであった。

戦後まず活動を開始したのは、1945年東ベルリンに設立されたディーツ社であるが、西の方は1953年にいたるまで20年間活動を停止していた。もちろん両社の出発点の8年といううちは、ドイツが占領下にあったことから生じた政治的な理由によるところが大きいと考えられる。東ベルリンのディーツ社が、ドイツ民主共和国最大の社会科学専門出版社として、「マルクス・エンゲルス著作集」など大きい企画を次々にこなし、毎年新刊重版あわせて数百点にのぼる書籍、パンフレットのほかに4点の定期刊行物をだして、活潑・多彩な活動をくりひろげているのに、西のディーツ社は再発足以来の20年間に約80点（うちリプリント11）を出版したのみで、まったくの小出版社として、目立たない存在となつてしまった。

双方のディーツ出版社のもととなったディーツ社の創立者 Johann Heinrich Wilhelm Dietz (1843—1922)

がシュトゥットガルトに Verlag von J. H. W. Dietz を設立したのは1881年のことであるが、3年前の78年にはビスマルクの社会主義鎮圧法が布かれていた。ディーツは1875年に社会民主党系の「ハムブルク・アルトナ人民新聞」の設立に加わって、この新聞のために働いていたが、社会主義鎮圧法によって発行禁止となり、さらに80年にはハムブルクから追放されていた。こういうディーツにとって周囲の情勢はきわめてきびしかったというべきであろう。しかし出版社を設立した年の10月にハムブルクの選挙区から帝国議会へ当選したことは、社会民主党員として名声が高かったことを証明している。

1882年にはじめて出版された2冊の本が、“Edelsteine deutscher Dichtung” と “Volksfremd wörterbuch”（ただし両書とも既に他の出版社から出されたことがあった）であったことは当時のディーツをとりまく環境を想像させる。ただ、後者の「人民外来語辞典」の著者が社会民主党の指導者 Wilhelm Liebknecht であり、前者「ドイツ珠玉詩集」の編者がその娘婿で帝国議会議員であった Bruno Geiser であったことは、当時の政治情勢と出版者、著・編者それぞれの政治的立場とをあわせて考えてみると、きわめておもしろい。

このディーツ社の本格的活動は1883年の“Die Neue Zeit”（新時代）の発行からはじまるといえよう。この月刊誌は41年間にわたって刊行され、1923年に終刊となっているが、社会民主党の理論水準と苦悶のあととを示している。1895年にはじめてマルクスの“Das Elend der Philosophie”（哲学の貧困）が出版された。ディーツは1886年にA. ベーベルなどととも裁判にかけられ、6カ月間入獄するということもあった。87年にはやはり1923年までつづいた“Internationale Bibliothek”（国際叢書）の刊行がはじまった。これは67巻までつづき、ディーツ社の名声をあげた。1890年にはビスマルクが辞

職し、ついで社会主義鎮圧法も廃止された。亡命中のレーニンの「何をなすべきか」がロシア語で1902年にこの出版社によって出されたのも、出版活動が自由になったことを示している。こうして1906年には社会民主党がこの出版社の経営上の責任を負うこととなった。やがて、第一次大戦、第二インターの崩壊、インフレーションという逆境の中で1922年ドイツは——恐らく失意のうちに——亡くなり、J. H. W. Dietz Nachfolger と社名を改め、本拠をベルリンへ移した。

ドイツ生存中の41年間に出版されたのは単行本 300 点以上、定期刊行物 6。版を重ねたものも多く、もっともよく出たのは、ペーベルの “Die Frau und der Sozialismus” (婦人と社会主義) で22万部に及んだ。ドイツ歿後悪戦苦闘はつづき、ある時は他の出版社と共同出版をおこない、さらにブック・サークル (加入者 4 万名) を組織して出版をつづけ、やがて 1933 年をむかえることとなる。(1)

海外ニュース

『英国書籍の総売り上げ高』

英国書籍の売り上げ統計が Bookseller 誌上に紹介されている。1973年の数字は最終的なものではなく、推計にすぎないが、前年比も着実に伸びており、輸出の比率は1969年をピークに年々下降してきたが、再び盛り返したのが目立っている。

年	合 計	国 内	輸 出	輸出%
1939	10,321,658	7,167,059	3,154,599	30.0
1949	34,297,252	24,498,414	9,798,838	28.6
1959	66,945,183	41,551,223	25,393,960	37.9
1969	145,893,000	77,370,000	68,523,000	47.0
1970	153,676,000	85,835,000	67,841,000	44.1
1971	186,635,000	106,090,000	80,545,000	43.2
1972	211,525,000	127,202,000	84,323,000	39.9
1973	236,320,000	137,621,000	98,699,000	41.9

(The Bookseller, '74 10月12日号より)

『ノートン社がリブライツ社を取得』

W. W. Norton & Company が Liveright を取得したことにより、小説や文芸書の出版では高名な二つの出版社

が一つになった。契約は、リブライツ社の前社主、社長で New Republic 誌の編集長でもある Gilbert A. Harrison とノートン社の社長 George P. Brock との間で、9月25日に、9月1日にさかのぼって締結された。協定によりリブライツはノートンの完全な子会社となるが、別会社として社名も存続する。リブライツのゼネラルマネージャー Victor Schmalzer と編集長の Ned Arnold はそのまま同社に残留する。

ノートン社は、創立51年だが、どこの系列にも属さぬ独立した出版社では最古、最大である。しかも、実際に業務にたずさわっている人々によって所有されている出版社として知られている。同社の従業員の半数以上が同社の株主なのである。同社の著者は Adrienne Rich や A.R. Amos, Erik Erikson, Joseph Lash, May Sarton, Fawn Brodie など現代詩人・作家のそうそうたるメンバーをそろえている。

リブライツ社は 1917 年創立、Sherwood Anderson, William Faulkner, Hart Crane, Ernest Hemingway, Eugene O'Neill, T. S. Eliot, Theodor Dreiser など世に送り出して来た出版社である。幾多の変遷を経て、1969年に Harrison 氏が所有するにいたっていた。

(Publishers Weekly, '74 10月14日号より)

——紀伊國屋書店提供——

ニュース

☆英国 Collets 社の Mr. William Norris 及び Export Manager の Mr. Peter Simpson 10月中旬来日。

☆オランダ Elsevier/Excerpta Medica/North-Holland の Exec. Director, Mr. J. C. Baltzer と Trade Manager の深田良治氏10月下旬来日。

☆第6回国際書籍展視察団(団長アカデミア・ミュージック平岩寧氏)は10月19日(土)夜無事帰国した。

通関統計

外国貿易概況(大蔵省関税局編、日本関税協会発行)
1974年7月号所載。

書籍、新聞、雑誌の輸入額。

昭和49年7月 \$7,559,000 1月以降累計 \$45,807,000

昭和48年7月 \$7,870,000 // \$38,858,000

(注)此の統計は、CIF価格で10万円以下の少額貨物は含まれない。

事務所移転ご案内

今般次の通知がありましたのでお手許の会員名簿の訂正をお願い致します。

㈱ トツパン

〒101 東京都千代田区神田駿河台1-6

主婦の友ビル 4階

☎ (03) 295-3461 (代表)

新入会員のお知らせ

今回下記のかたが会員として入会されましたので、お手許の会員名簿にご記入願います。

賛助会員

(有) オークラ・サイエンス 代表者 大垣雅昭氏

〒101 東京都千代田区三崎町3-6-15 東和ビル

☎ (03) 264-3980

総代理店ご案内

次の通り日本総代理店の案内がございました。

お手許の Agent List にご記入願います。

㈱ 教文館 ☎ 561-8446

Encyclopedia Judaica in 16 vols. '71, set ¥240,000
(Keter Pub. House, Israel)

㈱ 丸善 ☎ 272-7211

Luzsa, G.—X-Ray Anatomy of the Vascular System.
'74 (Butterworth) ¥9,680

Smith, M. B.—Handbook of Ocular Pharmacology.
'74 (Publishing Sciences Group Inc.) ca ¥5,730

Microbial Ecology. A CRC Press "Monotopic"
TM Reprint. Ed. by A. Laskin & H. Lechevalier
(CRC Press) ca ¥6,270

㈱ テクニコンドキュメンツ サービス ☎ 264-8827

The European Computing Congress 1974
(Conference Proceedings)

1,232 pages, Hardbound

Published by Online, Brunel University, England
¥22,100

おしらせ

軽金属協会

103 東京都中央区日本橋2丁目1番3号(日本橋朝日生命館)
電話 東京 (03) 273-3041 (代表)

から、下記雑誌の日本販売総代理権を取得した旨の連絡がありましたので、おしらせします。

World Aluminium Abstracts 年間一般価格 ¥30,000
特別価格(官公庁、図書館) ¥20,000

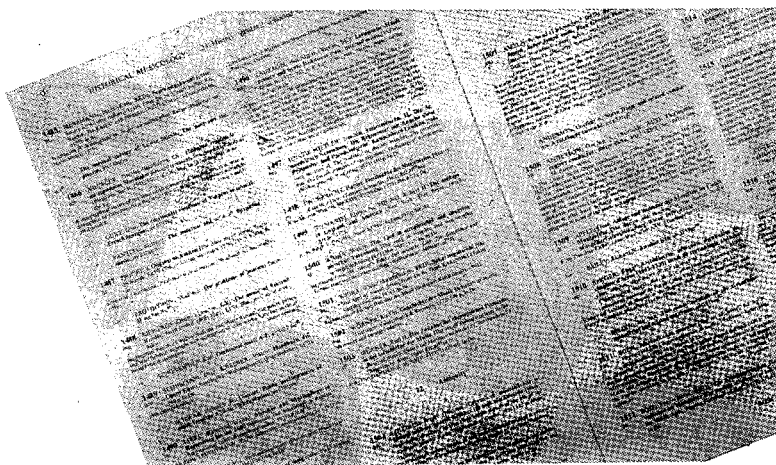
国際音楽文献要旨目録

rilm abstracts *of music literature*

Répertoire International de Littérature Musicale

International Repertory of Music Literature

Internationales Repertorium der Musikliteratur



■発行回数……………年 4 回

■年間御予約購読料……………¥16,200

○RILM abstracts 誌は音楽各分野のもっとも新しい論文や著作に関する情報を
知るうえで、欠くことのできない貴重かつ有益な文献目録です。図書館・研究
室にとっては必需品になることでしょう。

■創刊 Vol. I : 1967 (1969年発行)

現在 Vol. VI, No. 2 : 1972 (1974年夏発行)

Vol. I ~ V 各¥10,800

編集・発行

International RILM Center

日本総代理店

アカデミア・ミュージック株式会社

東京都文京区本郷2-26-11 Tel. 813-6751

昭和49年11月 通巻第91号 洋書輸入協会

編集者 寺久保一重

〒103 東京都中央区日本橋1丁目20番3号 藍沢ビル302号室

☎ 271-6901

〒530 関西支部 大阪市北区芝田町28 第一山中ビル

☎ 371-5329